東京ジャーミイ金曜日のホタバ
2007 年 1 月 19 日

クルアーンを読む

親愛なるムスリムの皆様。「クルアーンを読む」とはどういうことでしょうか。

クルアーンの精神を理解することは、何を意味するのでしょうか。聖クルアーンは、どういう意図で人々に啓示されたのでしょうか。聖クルアーンは、人々にどのようなことを獲得させる目的で下されたのでしょうか。

聖クルアーンは、人々にどのような生き方をさせるために下されたのでしょうか。聖クルアーンの啓示された各章や句は、人々に、お互いの権利を尊重しあいつつ、常に前向きに生きるために下されたのでしょうか、それとも後退するためにもたらされたのでしょうか。

このような問いに正しく答えることができるなら、クルアーンの精神を理解し始めた、ということです。そしてその後で、私たちに、クルアーンを読むという扉が開かれるのです。

例えば、女性の遺産相続権が一切（いっさい）認められていなかった状況において、最低限の取り分として、男性の二分の一が認められるようになりました。しかし、男性と同額の取り分を与えたとしても、これは決してクルアーンの精神に反することではないのです。クルアーンはこれを妨げることはせず、むしろ奨励するでしょう。

つまり、クルアーンで示されている権利は、最低限の、それ以下とはなりえないものとして示されているのです。これを増してはいけない、とする各章や句も、預言者ムハンマドの布告もないのです。

私たちはクルアーンの精神を理解できていないため、クルアーンを読むこともできずにいるのです。だから、章句の文字面にとらわれてしまい、そこで私たちに与えられているメッセージを理解できないのです。

クルアーンを読むためには、各章や句がどういう意図で、男性、女性に何を獲得させる目的で下されたのか、ということに目を向けなければなりません。

この世界において、人間の歴史上の最大の変化をもたらしたクルアーンの、この精神を理解せず、文字面にこだわり、「これだけのものしか与えていない、これ以上のものは禁止されている」と単純に考えてしまうことはこの上ない不注意であり暴挙でさえあります。

例えば、奴隷制度があたりまえであったその当時の社会では、奴隷を解放することがこの上ないイバーダであることを説き、奴隷制を終わらせるという観点を持つイスラームを逆に奴隷制を承認していると見なすことは事実を大きく捻じ曲げることに他ならないのです。

イスラームでは人権の侵害を禁じるという点以外には、決して何事においても強制をしていません。アッラーの使徒（彼の上に平安あれ）にさえ「あなたは彼らに対して強制するものではない」と啓示されているイスラームを、強制的、抑圧的な教えだとすることは、非常に大きな誤りであり、クルアーンの精神を全く理解していないことの明らかな証明となるものです。

私たちはクルアーンを読むこと、イスラームの教えを理解することを責任として負っています。自らの将来を考えるなら、誤りについて、「私の周りのムスリムはみんなこうやっている」という弁解は通用するものではないのです。

人を見るのではなく、クルアーンからイスラームについて学ぶことが、私たちにとって義務なのです。このことを怠ったならばその結果は、来世において私たち自身に帰ってきます。

クルアーンを読み、それに則って（のっとって）生きることができる人はなんと幸福なのでしょうか。